

春燈

5 月号

May 2010



主宰の句

安立公彦

水温むころや入り日の三番瀬

口中に大川の香やさくら餅

村人にひと日の綺羅や仏生会

たそがれの色となりゆく豆の花

青き踏むとき日の本の女なる



燈下集



○ 西川保子

折鶴の鋭角寒の戻りけり
水温む徒食の日々にかくも慣れ
土筆摘みぬて万葉乙女にはあらず
まんまろき土偶の口や春の風
獺のまつり過ぐれば母の忌なりけり

○ 富山俊雄

梅の宿隠れ住むとにあらねども
いちにちは雨にけぶれり梅屋敷
てふてふ黄買物なにかひとつ忘れ
下萌や部活十周して終る
亀鳴くや一夜に十も齡とりて

○ 上山永晃

寒ざくら川音黙しぬたりけり
志あれど余寒の運不運
桃の花上手な嘘を付かれけり
雨に喧ぶ大パノラマや二月尽(サンシャイン60)
喜寿自賛余寒自愛を命じけり

○ 渡辺鶴来

無季俳句ばかりが出来て桜餅
チューリップ一本いけてひとりつ子
きさらぎとふ語感よろしき朝かな
雄鶏を走らせし春霞かな
鶴を見に動物園にきて寒し

○ 佐藤信子

手で拭ふ父母の墓石や春の雪
まだ若き絵解きの僧や涅槃変
雛の夜や囁き洩るる御所ことば
あたたかや凭れて丸き太柱
卒業や並んで小さき母の肩

○ 本多游子

煮返しの多き夕餉や二月尽
薄氷や茶碗の底の御飯粒
仏壇に位牌ひとつや春の鶉
桃の昼踏切ばかりよく鳴つて
わが齡問はれてみたる落花かな

○ 山内四郎

東京は大雪といふ髭を剃る
春浅しわが胸に棲むオフェーリア(舞)
春立つや水平線の向かう側
波音に春のつぶやきありにけり
耕してをり手を上げて通りけり

○ 植田利一

聴く耳は持たねど耳の日は来り
触れたくて芽吹く辛夷に近づきぬ
白酒を注ぐ黄瀬戸の盃小さし
雛あられつまみて無聊託つなし
春昼のあまりにしづか過ぎにけり

○ 柴崎富子

爪跡のまま凍ててをりけもの徑
芽吹き初む柳背伸びの水鏡
鐘かすむ浅草にきく京ことば
風音や雨音や啓蟄の勇み足
春雷の自己顕示めく高音かな

○ 園部露郷

告天子揚る天路のある如く
灯をつけてよりかまくらの息つける
白息をゆたかに軀雑魚を売る
生国を捨つる気はなし狸汁
廢校や百葉箱に懸巢の巢

○ 松橋利雄

冬牡丹雲間の日差し享けにけり

冬牡丹修羅の浮世を遠くせる

影あはく土に生きとし冬牡丹

義理欠くなは母の遺言冬牡丹

冬牡丹気はもちやうと諭さるる

○ 小島禾汀

親鸞を龍馬を読みつぎ春を待つ

うぐひすを確かに聴きし地獄耳

「2」の数字重なる日付春の珍

和平星まこと星黄泉春の星

芹の水富士より貰ふ真澄かな

○ 橋爪隆

卒寿なほひとり厨や春寒き

立ちつくす底抜け空や春寒き

二番底てふバレンタインの地下売場

束の間の夢見し妻よ明け易き

棄老伝説夢ならざりし春寒き

○ 橘正義

立春の雲を映して利根動かず

井戸香炉銘は「此の世」の余寒かな(根津美術館)

てつちりの煮えばな逃してはならず

鍋焼の指図うるさくなつて来し

唄へがたきは水漢でありしか

○ 小林のり人

鰐口の緒や一頭の蝶凍つる

風花や串の焼鳥賊立食ひす

篋のはじきたる雪煙かな

犬小屋の雪おろし竹箒かな

立春や臨時ダイヤのラッセル車

○ 三上程子

駅で会ひ駅で別るる春コート

春めくや垣根を抜くる猫と風

ふぞろひの椅子を愛せり安吾の忌

野を焼く火人うつくしく逝きにけり

海猫渡る波頭に胸を濡らしつつ

○ 浅野 洋子

遠き窓近きまど春のともしかな

雛の夜や派手目いとはぬ江戸小紋

潮騒を胎音と聴く春岬

折からの月の出潮や白魚宿

もの忘れ診察室てふ日永かな

○ 井上 春子

空つぼの一輪挿しの余寒かな

春水にあらず肺腑に溜まりしは

雛の日や病院食のちらし寿司

肺の水ぬけて身軽や山笑ふ

引明けの空の静寂や木の芽張る

○ 中野 あぐり

寒夕焼消ゆるまで見て暗子の忌(故坂間先生)

丹念に塗椀仕舞ふ春の雪

地卵にまつはる羽毛春兆す

涅槃図の殊に小さきものの声

歲月やわが身と古りし内裏雛

○ 小石 珠子

鶯いろの簇がり永しシクラメン

目葉のつめたく涙はぬくきかな

文書かず遺書も記さず春炬燵

完治てふ春あかつきの夢に覚む

にぎやかに妣と姉来よ彼岸道

○ 諸戸 せつ子

春光や宇治橋の反りうつくしき

一皿の赤福頰ち春火鉢

春潮や海女は逆さに白き足

黄心樹咲きちちの顔ははの顔

山独活を鉄砲和に日曜日

○ 大嶋 洋子

白壁に夕日射しゐる針供養

多喜二忌や暮れて近づく海の音

防風とり母在りし日に及びけり

マジヨリカの壺の歲月鳥雲に

春の灯や遺品のなかの舞扇

〈春星賞受賞作家・特別作品20句〉

春動く

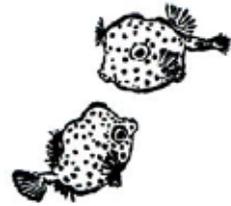
矢口笑子

動物園駅前交番燕来る
空広き多摩丘陵の芽吹きかな
蟻食の掘りし大穴春動く
下萌やきりんが覗く乳母車
春の雲掴み損ねし手長猿
木洩日のくすくす笑ひ鳥交る
水舐めてうそぶく虎や春疾風
春の夢覚めてチーター失速す

縞馬の縞の迷路や蝶の昼
囀や夫と分け合ふ缶コーラ
話など聞いてはをらず揚雲雀
猿山のボスの気苦労春の雷
子雀や舌つたらずの口答へ
逃水の逃げ込む動物慰霊塔
永き日や持て余したる象の鼻
犬ふぐり歩き疲れてしまひけり
蛇穴を出て動物園の死角かな
チンパンジーのカメラ目線や春愁
潜りては天衝く尾羽残り鴨
フラミンゴ春夕焼に紛れけり

当月集

安立 公彦選



○ 清水美子

料峭や潮の引きゆく船溜

子規庵の芽吹き待たるる六畳間

声明やなんぢやもんぢやの芽吹き初む

一山を真白に染めて梅香る

流し雛相寄りて瀬に消えにけり

○ 篠原幸子

梅が香に撫牛首をもたげけり

よすがにと御坊に賜ふ梅一枝

買ふあてのなき雛市を訪ねけり

引締まる虎の土鈴や二月尽

ふくよかな師の声かこむ春の宵

○ 都丸美陽子

母の雛誰がためとなく飾りけり

男ぬて寡黙またよき梅見かな

春雪や人それぞれの灯に帰る

咲ききつて昨日は遠し落椿

目にしむる空の青さや多喜二の忌

○ 片山博介

冴返るものに詩を書く指の先

雁風呂や低く謡へば海うねり

賢徳の面と対すや雪解風

雨細し鶯餅は目を瞑り

叡山にうす紅の雲雛納

○ 矢口笑子

愛猫の声うらがへる余寒かな

草食系男子一瞥恋の猫

猫の目に宿る野性や春疾風

雌猫の寝れも春の景なりけり

その中に猫も加はり雛の客

春燈の句

安立 公彦選

春の日の遺跡掘る土小山なす

千葉 吉村さよ子

切通し抜けて夕日の落椿

新たな誓言ゆるぐ二月尽

こけし雛手に還暦をひとり言つ

羊水にたゆたふごとし紀伊の春

大阪 小田 明美

春浅し浅葱の色の手帖買ふ

催花雨に紅煉らせて春の城

春雷のほろほろ窓辺ゆき過ぎぬ

六方踏んで決まる容や春兆す

東京 川崎真樹子

スキップといへど五十路や下萌ゆる

パンジーの思案に暮るる首を垂る

冥王星の歪な軌道竜天に

まぼろしの窯跡さがす露の臺

広島 藤村 達江

碁笥の蓋永久に閉ぢけり春の雁

玻璃越しの日差しに浸る二月かな

風花や汐入川の舫ひ舟

山里に残る鈴の音夕遍路

千葉 鶴岡 紀代

夫も子も父も二月の仏なり

涅槃西風喪の帯きつく締めにけり

露味噌や看とり疲れの卓の上

伝法院庭すりぬけてつばくらめ

仲見世の店の奥まで涅槃西風

東京 小俣 剛哉

梅香る写経の女の筆なごみ

涅槃会への僧と乗合ふ渡し船

深大寺庫裡は茅葺き春障子

埼玉 鈴木 撫足

老酒を奢るや春聯小飯店

ゼウス化する黄金の雨や春しぐれ

第二釦渡せぬままに卒業す

国破れ凍裂の樺切り倒す

福島 物江 康平

極寒や虜囚の腰の火打石

存へて地の塩たれや開戦忌

菜の花や沖に乱心沈め征く



余言

安立公彦

草城忌遺影の銅版秘蔵せり

富山 俊雄

「草城忌」は一月二十九日。日野草城は昭和四年、「ホトトギス」同人に推挙されたが、新興俳句運動に参画し、同人を除籍される。その折の主幸誌「旗艦」に、若き日の安住敦が入会し、第一句集『まづしき饗宴』を上木したことは周知の通りである。

日野草城は昭和二十四年「青玄」を創刊する。作者はその「青玄」に入会、草城の薫陶を受ける。数年後草城の死去に伴い、一時俳句を中断するが、その後「春燈」に入会する。草城は作者の俳人としての姿勢を見出した最初の師であると言えよう。そして終生の師と仰ぐ安住敦と草城はまた「旗艦」で結ばれていたという深い縁がある。

この句には作者の草城への思いが強く出ている。富山さんは今夏第四句集『山居抄』を出版される。

粗鬆症の骨とてわが身齋打つ

上山 永晃

新年大会の句稿の中にこの句を見たとき、自ずと襟を正す思いだった。骨粗鬆症といういかにも発声しにくいこの病は、その言葉にも似た厄介なものと言われる。

作者はご承知の通り医師に身を置く人、国手である。そういう作者であれば、この「骨とてわが身」に一人の感慨が籠っていることを知る。

又、一句の内容から見る時、この句の新しさに瞠目する。「齋打つ」という伝統ある季語が、今日的な内容と結びあい、みごとに現代俳句となっている。

鳥海のかぶさる屋根の雪卸す

園部 露郷

作者の住いは秋田県湯沢市。西の方には名山と言われる鳥海山がそびえている。斎藤茂吉が「ここに浪の上なるみちのくの鳥海山はさやけき山ぞ」と詠んだ秀峰だ。

「雪一丈卸してつひの栖かな」という句の通り豪雪地帯なのであろう。一茶の「つひの栖」は「雪五尺」。湯沢の雪の深さが分る。冬場の鳥海山麓の雪は、まさに「鳥海のかぶさる屋根」の通りの降雪なのだろう。しかしこの句には、雪卸しの作業より、鳥海山の秀麗な山谷が感じられ、背景の空の青さが浮かんでくるような趣がある。

まゆ玉や脚註真砂女三百句

松橋 利雄

『脚註鈴木真砂女集』は、執筆者および、本部事務局のご協力により、昨年未めでたく出版された。真砂女の主だった句は殆ど採録してある。この句集は、春燈会員以外の人からの購入申込みも多かつたと聞く。

平成以降、俳人真砂女の読者は急速に増えてゆく。テレビの影響もある。しかしそれ以上に、作品の飾らない表現、常に前を向いて歩く姿勢、加えて一句の質の高さ、それらが相乗して、真砂女の読者を増やして行ったのだ。

作者も執筆者の一人。新年、改めてこの句集を手にしながら、脚註に見入る作者の姿が浮かんで来る。

知恵の輪の抜けし一瞬冬の雷

片山 博介

子供の頃知恵の輪で遊んだ人は多かるう。それを作者はいま懸命に解こうとしている。その知恵の輪が解けた瞬時冬の雷鳴が聞えたという。構成のきっちりした句だ。

作者はまた、〈萱の芽や船過ぎてより波の音〉という写生句も出している。双方ともに大切な俳句の形である。

夕空に声吸はれゆく春の鳶

府川 昭子

立春を過ぎると寒さの中にもどことなく明るさが感じら

れる。作者はそういう一日、海辺に出て空を仰いでいたのだろう。見ると鳶が輪を描いている。

いつか行った外房のホテルでは、朝、中庭で鳶に餌を撒いていた。餌を目当てに舞い降りる鳶の声は余りいい感じのものではない。作者の場合は、「夕空に声吸はれゆく」という表現から、舞う鳶の優美な姿が見えてくる。「春の鳶」にも、なんとなく早春の気配が漂う。

灯を消して夫水仙の香を言へり

廣瀬 克子

一読やすらかな気分になる句だ。

昼のうちに寝室の花びんに挿しておいた水仙が、灯を消したいま、静かに香ってくる。もう睡ったと思っていた夫が、ひと言花の香りを口にする。妻はその声を聞きながら平穩に過ぎた一日を感謝の思いでふり返る。

この句は私小説の世界である。わずか十七字の句が、私小説の域に及ぶところに、俳句の持つ強靱さを感じる。

老いの皺一つ増やして松過ぎぬ

前川千枝子

「顔の皺」でなく「老いの皺」である。また「年の暮」でなく「松過ぎぬ」である。

わが身の老齢化を詠んでいて一句は明るい。そこに自ずと滑稽味を生ずる。意図して作り上げた滑稽味でなく、一句に自ずと浮かぶ滑稽味こそ本ものの俳句である。